

ラーニングポートフォリオを用いた質的な直接評価： カリキュラム・ポリシーに定める学習成果の一評価

田中洋一^{*1*2}, 平塚紘一郎^{*1}

^{*1} 仁愛女子短期大学, ^{*2} 熊本大学大学院

The Qualitative Direct Assessment using the Learning Portfolio: The Assessment of the Learning Outcomes is defined by Jin-ai Women's College Curriculum Policy

Yoichi Tanaka^{*1*2}, Hiratsuka Kouichirou^{*1}

^{*1} Jin-ai Women's College, ^{*2} Kumamoto University

仁愛女子短期大学における学習成果の評価方法は、カリキュラムポリシーに明示している。その評価方法の1つとして、質的データの直接評価であるラーニングポートフォリオを用いている。本稿では、オープンソースeポートフォリオMaharaを用いたラーニングポートフォリオの設計及び運用の実践を報告する。特に、ディプロマポリシーに明示した学習成果を、セメスターごとに根拠にもとづき自己評価させる仕組みを説明する。

キーワード: ラーニングポートフォリオ, 学習成果の評価, オープンソース

1. はじめに

平成28年3月31日に文部科学省が『「卒業認定・学位授与の方針」(ディプロマ・ポリシー), 「教育課程編成・実施の方針」(カリキュラム・ポリシー)及び「入学者受入れの方針」(アドミッション・ポリシー)の策定及び運用に関するガイドライン』(以下, 3ポリシー・ガイドラインと記す)を公開したが, カリキュラム・ポリシー(以下, CPと記す)において「学修成果の評価を具体的に示す」と明記したことが重要な点の一つである。

平成24年8月に文部科学省が公開した質的転換答申に必要性を示され, 3ポリシー・ガイドラインでも推奨されているのが, ルーブリックやアセスメント・テストのような直接的な評価方法及び学修行動調査のような間接的な評価方法の開発, そして学修ポートフォリオによる振り返りの支援である。仁愛女子短期大学・生活科学学科・生活情報専攻(以下, 本専攻と記す)のCPにおいて, 学習成果の評価として, 全学的な5つの方法(2.1の①~⑤)と本専攻独自の3つの方法(2.1の⑥~⑧)を定めている。

2. 学習成果の評価

2.1 生活情報専攻における学習成果の評価

本専攻のCPでは, 「教育の内容」, 「教育方法」, 「学習成果の評価」を定めている。「学習成果の評価」は, 下記のとおりである。

【学習成果の評価】

生活情報専攻では, 生活科学学科の「卒業認定・学位授与の方針」(ディプロマ・ポリシー)に掲げる「生活情報専攻の学習成果」(卒業時に備えるべき能力)の修得状況は, 以下の方法により把握し, 評価します。

- ① 各科目の講義概要に示す配点比率にもとづく成績評価
- ② 各科目の成績評価から得られるGPA
- ③ 本専攻で支援する免許・資格の取得状況
- ④ 学修ポートフォリオ(「学習成果確認シート」, 「充実した学生生活を送るために」)
- ⑤ 学修行動に関する調査(他機関によるものを含む)

の結果

- ⑥ ジェネリックスキルテスト（入学時及び卒業時）
- ⑦ 情報活用力診断テスト
- ⑧ 生活情報専攻ラーニングポートフォリオ

ここで、学習成果の評価について補足する。③の免許・資格としては、全国大学実務教育協会の情報処理士やビジネス実務士等が挙げられる。⑤の学修行動調査としては、Fレックス（福井県大学連携プロジェクト）の学生意識調査や短期大学基準協会の短期大学生調査が挙げられる。⑥のジェネリックスキルテストは、河合塾のPROGを入学時及び卒業時に実施している。⑦の情報活用力診断テストとしては、ICT利活用力推進機構のRastiを入学時及び1年前期期末に実施している。

2.2 学習成果の評価に関する分類

教育の質を保証するため、日本の大学においても学習成果の評価が必須となっている。学習評価としては、直接評価か間接評価かという縦軸、量的データか質的データかという横軸の2軸で分類すると、以下の4つのタイプに分けられる（松下 2012）。

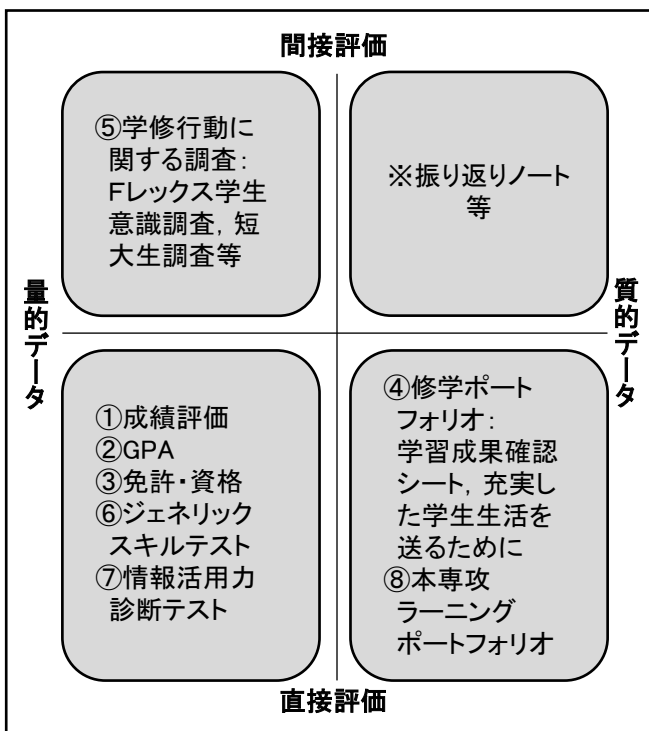


図 1 学習評価の分類（生活情報専攻）

(i)量的データの直接評価である客観テスト（標準テスト）等, (ii)質的データの直接評価であるパフォー

マンス評価（ポートフォリオ評価）, (iii)量的データの
間接評価である学生調査, (iv)質的データの
間接評価であるリフレクションシート（振り返りノート等）. 学位授与の保証としては、これら4タイプを連携することで学習成果を評価することがもとめられる。2.1に記述した学習成果の評価のうち、①成績評価、②GPA、③免許・資格、⑥ジェネリックスキルテスト、⑦情報活用力診断テストは、(i)量的データの直接評価に位置づけられる。④修学ポートフォリオ、⑧本専攻ラーニングポートフォリオは、(ii)質的データの直接評価に位置づけられる。⑤学修行動調査は、(iii)量的データの
間接評価に位置づけられる。本専攻の「学習成果の評価」には、(iv)質的データの
間接評価を定義していないが、いくつかの授業において振り返りノートを活用している。

3. 学習支援システム

本学では、学習支援システムとして、オープンソースのLMS「Moodle」とオープンソースのeポートフォリオ「Mahara」を運用している。Moodle Networkを利用し、仁短Moodleから仁短Maharaをシングルサインオンでログイン可能としている。

筆者はMoodleを授業ポータルサイトとして用いて、毎回の学習目標、授業内容、参考資料等を提示している。Maharaは、課題の提出、振り返りノートの記述を行い、受講者間で共有し、フィードバックを実施している。

3.1 eポートフォリオを用いるメリット

(1) 学習者支援ツールのため、提出・収集した学習成果物を学習者が俯瞰・省察しやすい。

ある授業では、Mahara 1ページに、振り返りノート・課題（文章）・課題（制作物）という学習成果物（アーティファクト）を整理し、15回にわたる学習の軌跡が俯瞰できる。この点ではLMSよりもeポートフォリオが優れている。また、紙のポートフォリオと異なり、動画をページ上で視聴できたり、関連する他のページへリンクで移動できたりする。

(2) ネットワークで繋がっているため、相互評価がしやすい。

Mahara のページごとに、他者と共有するアクセス権を設定でき、相互に閲覧や評価ができる。一つの課題に対する相互評価ならば LMS でも可能であるが、(1)のように一定期間の学習記録に対する相互評価では e ポートフォリオの方が優れている。他者の学習記録を相互評価することにより、自分自身の学習記録に対する省察が深まる。先述の授業における相互評価は 15 回目に行っているが、可能ならばセメスターの中間等でも行うべきである。

相互評価のメリットは 3 つある。1 つめは、他の学生に評価される効果である。教師のみに評価されるならば、点数が低くなるだけなので、学生によっては成果物の質に妥協する場合がある。それに比べ、他の学生に評価される場合は完成度のレベルが高くなる傾向がある。2 つめは、他の学生を評価する効果である。評価基準をもって、他の学生の成果物を閲覧することにより、他者の視点を理解し、考えがひろがる。授業評価アンケートでも、他者の成果物を閲覧できたことに対して好意的な評価がなされていた。3 つめは、閲覧や評価することにより、学習コミュニティ(共同体)の形成が進む。本授業の相互評価においては、評価対象者がコア・メンバー、同じクラスがアクティブ・メンバー、同じ授業の受講者(1つの学科や専攻の同学年)が周辺メンバーといえる。

4. ラーニングポートフォリオ

4.1 e ポートフォリオ・リテラシースキル

Jenson (2014) では、「e ポートフォリオとは、継続学習、学習の深化、目的に沿った学習に寄与する自身の学びを記録するための道具である」と定義し、e ポートフォリオ・リテラシーとして以下の 5 つのスキルをまとめている。e ポートフォリオ・リテラシースキルは図 2 のように螺旋状に繰り返される。

① 学習成果物を収集する (Collecting)

1 つめは、学習成果 (Learning Outcomes) の根拠 (エビデンス) となる学習成果物を収集し共有するスキルである。授業設計としては、獲得した学習成果を学生に説明させる、学習成果の到達度を示

すルーブリックを示す、学習成果に関する根拠 (エビデンス) の良い例を示す、根拠 (エビデンス) としてその成果物をなぜ収集したのかを説明させる等の手法が考えられる。

② 自己調整行動を記録する (Self-Regulating)

2 つめは、学生自らが新たな学習行動を管理するスキルである。授業設計としては、意図した学習成果に関連する行動を説明させる、学習スタイルを記述させ学習行動の効果を説明させる、行動変容の根拠 (エビデンス) を問いかける等の手法が考えられる。

③ 批判的省察を記録する (Reflecting)

3 つめは、明確な目標と有用性に基づき、学習の意義を文脈化するスキルである。授業設計としては、学習者が批判的省察を記述・共有する前に学習者間での信頼関係を築く、批判的省察のためのきっかけを与える、学習している知識やスキルと関連した自分の経験を書かせる等の手法が考えられる。

④ 知識の統合を記録する (Integrating)

4 つめは、学習を統合し、あらゆる状況へ転移するスキルである。授業設計としては、ある科目における学習を他の科目や授業外活動でどのように活用しているかを記述させる等の手法が考えられる。

⑤ 学習協調を記録する (Collaborating)

5 つめは、知識やスキルを創造するための学習コミュニティへ参加するスキルである。授業設計としては、興味・疑問・熱意に基づく自己選択での協調学習の機会を与える、ある知識領域における新たな学びをいかにして進めるかを示す等の手法が考えられる。

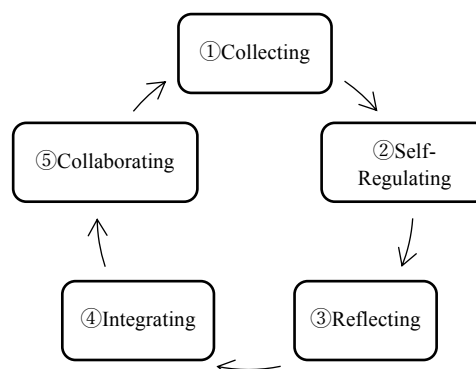


図 2 e ポートフォリオ・リテラシースキル

参考文献

- (1) Jill D. Jenson & Paul Treuer. :
“Defining the E-Portfolio: What It Is and Why It Matters”, Change: The Magazine of Higher Learning (2014)
- (2) 松下佳代: “パフォーマンス評価による学習の質の評価: 学習評価の構図の分析にもとづいて”, 京都大学高等教育研究 第18号, pp.75-114. (2012)

このeポートフォリオ・リテラシースキルを用いて、授業設計を見直したところ、「④知識の統合を記録する」ことがあまりできていないことがわかった。そのため、本専攻では2016年度からラーニングポートフォリオを導入した。

4.2 ラーニングポートフォリオの活用

「学習成果の評価」の⑧本専攻ラーニングポートフォリオこそが先述した、知識の統合のために導入したeポートフォリオである。

本専攻ラーニングポートフォリオとして、学期末(期末試験期間)ごとに、Mahara上に「この学期で身についた学習成果」ページを作成させている。生活情報専攻の学習成果9つに対する自己評価文、根拠資料、自己評価ポイントを左列に記述させると共に、右列に具体的な根拠(エビデンス)として、いくつかの授業や資格対策講座等の成果物(artifact)をブロックで挿入する。つまり、この課題は、MoodleやMahara等に収集した学習成果物をセレクションして作る、学期ごとのショーケースポートフォリオである。

生活情報専攻の学習成果

生活情報専攻で開講する科目を修得することにより、下記の能力(学習成果)を身につけます。

【知識・技能】

1. 情報に関する基礎的・基本的な知識・技能を身につけている。

自己評価ポイント [3]

自己評価文: Excelを使って、データの処理を行うことができました。高校の時に習っていたのですが、1年ぐらい関数を扱わずにいると処理の方法を忘れてしまいました。一から書いたり授業を受けました。SJM関数やAVをRANを関数などの基本的な関数の使い方や、IF関数の中に他の関数を入れる方法もできるようになりました。また、変化を表すときは折れ線グラフを使うなど、グラフは用途によって使い分けるのだと知りました。

根拠: 情報メディア入門で回答を見ずデータを処理できた

2. ビジネス活動に関する基礎的・基本的な知識・技能を身につけている。

自己評価ポイント [3]

自己評価文: タイプアップでのタイピングが、入学当初は30PM前後でした。また、正確さが95%もなく、打ち間違いが多かったです。しかし、打ち間違わないようにゆっくり打ったり、授業前に練習したりしていました。今では、45PMまで打てるようになりました。

根拠: 生活計算学演習で大体80点以上取れていた

3. コミュニケーションに関する基礎的・基本的な知識・技能を身につけている。

自己評価ポイント [1]

自己評価文: プレゼンテーション演習1で、パワーポイントの使い方を学びました。ス

ダウンロードできるファイル

- 試験対策-1 (成績一覧) .xlsx (20.68KB)
- 試験対策-2 (ボーリング大会) .xlsx (12.98KB)

テキスト

Video player showing a brick wall.

図3 ラーニングポートフォリオ例

5. おわりに

「卒業認定・学位授与の方針」(ディプロマ・ポリシー)に学習成果、「教育課程編成・実施の方針」(カリキュラム・ポリシー)に「学習成果の評価」を明示したことにより、本専攻での学びが明確になった。特に、学期ごとにラーニングポートフォリオを用いて、学習成果の自己評価をさせることにより、学生は学習成果及びカリキュラムマップの再確認をした上で、学びの省察及び統合が可能となった。